

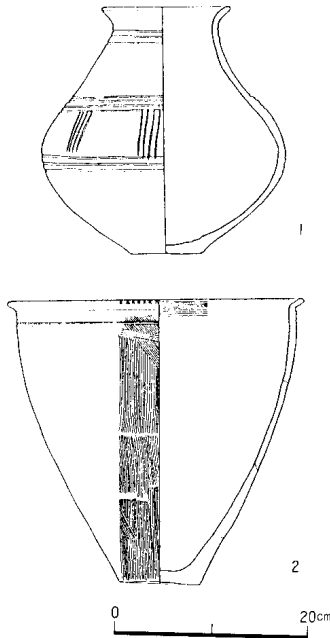
であることを推定させる遺跡である。しかし住居跡などは発見されておらず、主として箱式石棺・甕棺群からなる遺跡である。

そのあとの前期中葉では、長井遺跡のほか朝日奈遺跡（行橋市）・葛川遺跡（荻田町）などがあるが、特に葛川遺跡では、豊前地方では最初の環濠遺構が発見されたが、環濠の内側からは貯蔵穴が出土している。出土土器には瀬戸内系のものが見られ、また十七号貯蔵穴からは粟のまとまった出土があり、米以外の作物の栽培を知る資料として貴重なものとなった。

前期末より中期初めごろになると遺跡数は爆発的とも言えるように増加し、各地域に面的な広がりを見せるとともに前田山遺跡（行橋市）、下稗田遺跡（行橋市）に見られるように大規模な住居・貯蔵穴が営まれるようになり、大集落を形成するようになる。墓跡では箱式石棺墓・甕棺墓・土壙墓などが多く、墓域からは祭祀遺構も発見されている。また、竹並遺跡（行橋市）・下稗田遺跡からは畿内系の櫛描波状文土器が出土しており、畿内との交流も活発化したことを示している。

後期では、住居跡は下稗田遺跡など若干の遺跡に限られていて、実体はあまり明らかではないが、墓跡では亀田南遺跡（勝山町）・下稗田遺跡などに見られるように箱式石棺墓・石蓋土壙墓などが数多く知られている。その中でも特に上所田遺跡（勝山町）・石並遺跡（行橋市）出土の長宜子孫鏡、前田山遺跡出土の長宜子君鏡、山鹿遺跡（犀川町）出土の内行花文双獣鏡、上所田遺跡出土の鳥文鏡はそれぞれ箱式石棺墓・石蓋土壙墓から出土したものであるが、中国の後漢代や魏・晋代の舶載鏡であり、共同体の中でこのような舶載鏡を副葬するまでになった首長層の成長を考えるうえからも貴重な遺物と言えよう。また、天生田（行橋市）

第24図 葛川遺跡出土土器(一部)



1 壺 2 甕  
 (荻田町教育委員会「葛川遺跡」  
 荻田町文化財調査報告書第3集  
 より)

の大将陣から銅矛が、馬ヶ嶽（行橋市）山中から銅戈が出土している。後期の遺跡でも平遺跡（豊津町、箱式石棺・鉄鏃・鳳鏡出土）や川ノ上遺跡（豊津町、墳丘墓）は次の古墳時代とをつなぐものとして貴重な遺跡である。（第22表、第89図参照）

### 三 京都・行橋地方の主な弥生時代遺跡

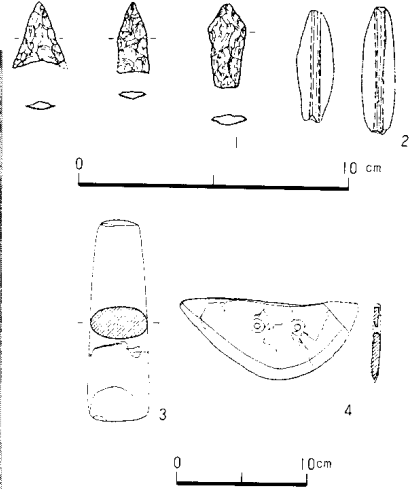
#### (一) 葛川遺跡（荻田町白川）

この地方で最初に発見された環濠遺跡。大型宅地造成に伴って昭和五十七年（一九八二）から翌年にかけて発掘調査が行われた。東西五七メートル、南北四三メートルの卵形の環濠内からは袋状貯蔵穴二七基が出土している。主として弥生前期中ごろの遺跡で、綾羅木郷遺跡（山口県下関市）出土の土器に類似するものがある。十七号貯蔵穴からは粟のまとまった出土があった。ほかには中期または中期後半の住居跡二軒、甕棺一基も出土している。（第24・25図、写真5参照）

第25図 葛川遺跡出土石器（一部）

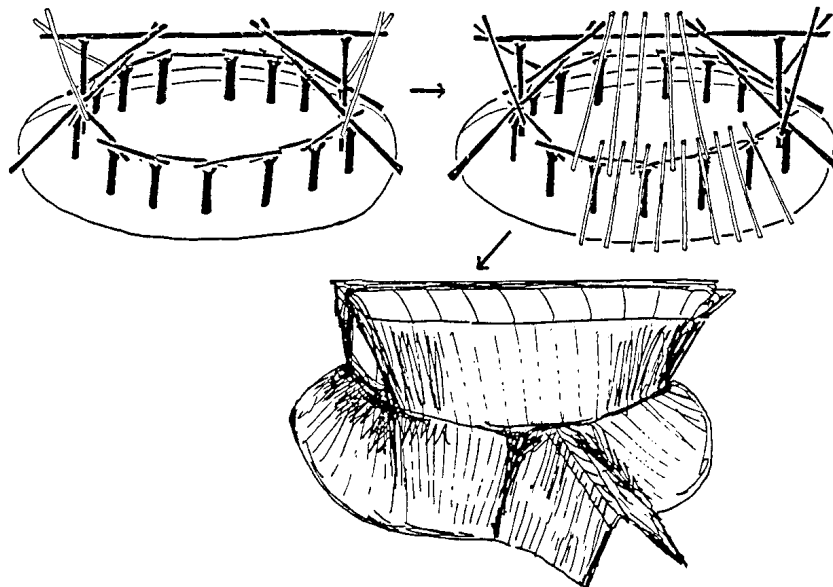


写真5 葛川遺跡の環濠



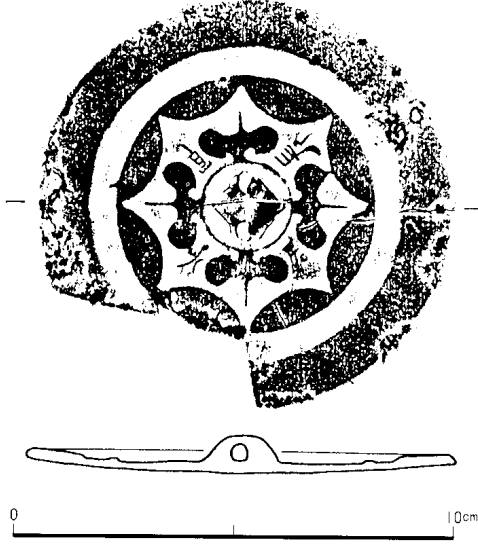
1 打製石鏃 2 石 錘  
3 磨製石斧 4 石 包丁

第26図 竹並遺跡弥生住居復元図



〔竹並遺跡〕竹並遺跡調査会編 1979より）

第27図 前田山遺跡9号石棺墓出土の内行  
花文鏡



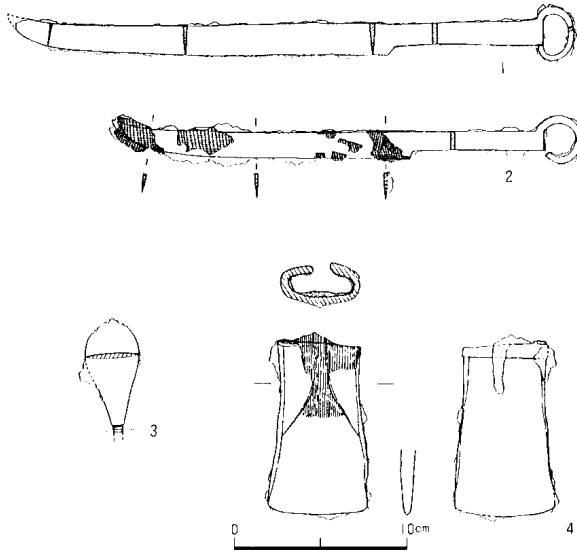
宅地造成に伴い昭和五十二年（一九七七）から昭和五十四年にかけて発掘調査が行われた。低丘陵上の南北に延びる二つの丘のうち一方は主として集落跡で竪穴住居跡・袋状貯蔵穴と幾らかの土壙墓・石蓋土壙墓が、そして他方は墳墓群で土壙墓・石蓋土壙墓・土器蓋土壙墓・箱式石

(三) 前田山遺跡（行橋市前田）

大型宅地造成に伴い昭和四十九年（一九七四）より昭和五十一年にかけて発掘調査が行われた。海拔四五〇mの低丘陵の尾根上からは、弥生時代の遺跡としては住居跡一九軒、土壙墓一二基、木棺墓三基、石蓋土壙墓三基、貯蔵穴一三九が出土、主として前期末から中期前半を中心とした遺跡であった。（第26図参照）

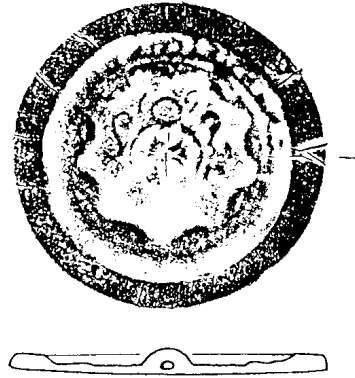
(二) 竹並遺跡（行橋市竹並）

第29図 前田山遺跡出土鉄製品



1、2 素環刀子 3 鉄鏃 4 鉄斧

第28図 前田山遺跡6号石蓋土壙墓出土の小型仿製鏡



（第27・28・29図は行橋市教育委員会「前田山遺跡」行橋市文化財調査報告書第19集 1987より）

棺・甕棺墓が出土している。袋状竪穴の一つから石製把头飾はとうしきが出土し、石蓋土壙墓と箱式石棺からそれぞれ銅鏡が出土している。

この遺跡は弥生前期中葉から始まり、中期を中心にして終末期にわたっている。(第27・28・29図参照)

(四) 下稗田遺跡(行橋市下稗田、前田)

大型宅地造成に伴い昭和五十四年(一九七九)より昭和五十九年にかけて発掘調査が行われた。遺跡は京都平野の中央部、上稗田から吉国にかけて南西から北東に連なる低丘陵のほぼ中央部に位置する。

発掘の結果、弥生時代に限れば弥生前期後葉・中期前葉を中心に前期中葉から後期・終末までに及ぶ遺跡で、集落跡・貯蔵穴群・墳墓群・祭祀遺構などが出土している。(第7表、第30・31図参照)

第7表 下稗田遺跡の時期別出土遺跡

時期	住居跡	貯蔵穴	墳墓
前期中葉	8	109	
前期後葉	93	945	石棺6 土壙墓144
中期中葉	41	300	石蓋土壙墓21 土器棺墓106
中期後葉	22	96	祭祀遺構27
後期(古墳初期)	77	12	方形周溝墓1、箱式石棺7、石蓋土壙墓2、土壙墓1、祭祀遺構1

(渡辺正気著『日本の古代遺跡34・福岡県』保育社 一九八七より) 一部改変

四 弥生時代の犀川

犀川町域で現在まで発見されている弥生時代の遺跡は二四遺跡に及んでいるが、そのほとんどが遺物の地表面での採集であったり、土木工事中に偶然発見されてごく簡単な調査しか行われなかったものが多く、犀川町の弥生時代を解明するにはあまりにも資料が乏しかった。

しかし最近になってようやく諸工事に先立って発掘調査が行われるようになり、調査例も増え始めて、ようやく弥生時代の犀川のようすも見え始めてきている。

犀川町域の弥生遺跡は、河岸段丘・台地や丘陵上からの発見が最も多く、弥生時代の人々がこのような場所を選んで生活していたことを示している。しかもこのような場所は、今川・喜多良川・高屋川・祓川やその他の小河川に面しているか、またはこれらの河川に挟まれた場所に位置している。これは生活に必要な水が容易に得られることや、この時代から本格化してくる水田稲作を行うための低湿地が近くに得やすいことなどが条件になっていたものと考えられる。

犀川町域での最初の本格的な遺跡調査は、昭和二十四年(一九四九)に行われた犀川小学校校庭の弥生遺跡調査であり、京都・行橋地方を含めても発掘調査のさきがけとなった。この遺跡は喜多良川と高屋川とに挟まれた南北に長く延びる丘陵の最先端部に所在するものであったが、弥生前期後半から中期後半にわたって営まれた集落跡であった。

住居跡とそれに付属する貯蔵穴が出土しているが、特に注目されたのは炭化麦の出土であり、この時期既に米作とともに麦の栽培も行われて